市制100周年記念 特別賞

砂川　結凪（すながわ ゆいな）　松枝小　3 年生

作品名：「ガラスのうさぎ」を読んで

図　書：ガラスのうさぎ

本当はせんそうの本はこわいので読みたくなかった。でも、おきなわにすんでいるおばあちゃんがこの夏も、「せんそうはまだ終わっていない。」と言ったのでこの本を読むことにした。

さい後まで読んでみて、たくさんのばくだんが落とされたり、きかんじゅうがうちこまれたりしてたくさんの人びとがなくなってしまい、やっぱりこわい話だと思った。

主人公のとし子ちゃんは、せんそうが始まってお父さんやお母さん、そして二人の妹がなくなってしまった。お兄さんに会うまでつらいけど、一人でがまんしてすごいなと思った。わたしだったら、お父さんを火そう場で見おくることがかなしくてできなかったと思う。また、おこつの中から出てきただん丸を手にして、「ぜったいにかたきをとってやる。」という決心をしたとし子ちゃんはすごいなと思った。わたしだったらさわれないし、もっとつらくなっていっぱいなみだが出ると思う。

この本は、東京でせんそうをけいけんしたとし子ちゃんの話でしたが、わたしのおばあちゃんはおきなわでせんそうをけいけんしました。おばあちゃんはき地をつくらせないために、朝早くからたたかっている。それなので、夏休みも冬休みもわたしは帰りたいけど、おばあちゃんにはんたいされて、大好きなおきなわに 2 年間も帰れていない。

東京でもおきなわでもせんそうでたくさんの人びとがなくなり、たくさんのなみだがながされた。そのような中で、とし子ちゃんは生きようという力強い思いをもちつづけた。そして、おばあちゃんは二どとせんそうにまきこまれないようにと、き地にはんたいしている。

お父さんがつくってくれた半分とけたガラスのうさぎが見つかり、とし子ちゃんにとっては一番大切なガラスのうさぎをみて家族のことをきっと思い出しただろう。もし、わたしがとし子ちゃんだったら、ガラスのうさぎを見えない所にかくしてしまうかもしれない。でも、お父さんとお母さんと妹の分までお兄ちゃんとがんばっていきたいという気持ちはとし子ちゃんとまったく同じだ。

通っている教会で教えてもらったのは、友だちとケンカをした時に、ぼう力をふるったり、わる口を言ったりするのではなく、こまっている人や弱い立場の人によりそう気持ちを持っていたら小さなへいわがあるということ。

おきなわのおばあちゃんにもへいわが来て、早くおきなわに帰れる日が来るといいなと思う。

この本を読んで、せんそうのこわさを知ることができた。だからこそ、へいわをつくっていきたいという気持ちが強くなった。